

2018. 11. 20 (火)

黒い十字架

沖村裕史

実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律すくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。

(エフェソの信徒への手紙 2章 14-17節)

焼け焦げた十字架

8月6日に、たくさんの人がヒロシマを訪れます。そして異口同音、熱線と爆風、放射能によって焦土と化したヒロシマの惨劇に言葉を失い、それとはあまりに対照的な、高層ビルが林立する今のヒロシマの姿に目を見張ります。しかし、その「目に見える」風景の変化とはまったく違うところで、あの戦争を体験した多くの人々が、「目には見えない」記憶の中で今も、戦争の酷さ、そして悲しみと苦しみを一人ひとりの心と体に深く刻んで暮らしています。

痛々しいその姿が目の前に立ち現れた、そう思えるものがありました。ヒロシマの教会堂の正面にかけられていた、真っ黒に焼け焦げた十字架です。

73年前、ヒロシマに落とされたたった一

発の原子爆弾によって、街もいのちもそのすべてが滅ぼされ、見渡す限りの茫漠たる瓦礫となりました。かろうじて外壁だけが残った、いくつかの建物があります。そのひとつが原爆ドームであり、ヒロシマの教会もそのひとつでした。翌年4月、イースターの日には礼拝を再開しようと廃墟の教会に集まった人々が片づけをしている時、何も無い、ただの瓦礫だと思われた会堂の跡地から、焼残った杉の木片が出てきました。

奇跡でした。

礼拝のために、その木片を美しい黄金比に組み合わせた十字架が作られました。それが真っ黒に焼け焦げた十字架でした。しかし、その十字架はその後50年もの間、ほとんど人目に触れることもなく、新聞紙にくるまれて教会の奥深くに保管されたままとまりました。

何故でしょうか。

真っ黒に焼け焦げた十字架など、誰も見たくなかったからです。

教会員のほとんどが被爆者であり、そして原爆によって愛する人を失い、生活を根こそぎに奪われたのですから、当然のことでした。それでも戦後50年を経てようやく、教会は、被爆の記憶を継承し、平和を祈り求めるために、焼け焦げたその十字架を礼拝堂に掲げることを決意しました。

見たくない十字架

8年前の夏、百歳を超えるひとりの婦人がその十字架を見上げながら、淡々と、実に淡々とこう呟きました。

「先生、こんな焼け焦げた十字架を誰も見たいとは思わないよね。でも、しょうがないのよ…」

すさまじい爆風に見舞われたとき、生まれたばかりの乳呑児が彼女の背中に背負われ、次女は彼女の足にしがみついていた。一瞬にして家の中のもの吹き飛ばされ、中庭から道路までが見渡せました。崩れた家の中に長女を探し出し、抱きかかえようとしたその時、彼女の片方の腕が、ひじから先のところで折れて骨が飛び出しているのに気がつきました。原爆で、彼女は一瞬にして夫と長男を失いました。「しょうがないのよね…」、あの呟きは、残された三人の女の子を女手一つで懸命に、何があっても笑顔を絶やすことなく育てあげ、百歳を超えるまで生かされてきた彼女の心の奥底から湧き出た独白であったのでしょう。

また、ある土曜日のこと。礼拝堂の掃除が終わり、ご奉仕くださった方々と一緒にお茶

を飲んで談笑していたとき、八十代の婦人が、世間話をするかのように、こんな話をしてくれました。

「先生、わたしね、魚が食べられないのよ。焼き魚も、お刺身も、全部ダメなの…」

彼女は広島でも名の通った割烹旅館の娘でした。おいしい料理に事欠かない境遇です。「それは、また、もったいない」と何も考えず軽く返すと、

「原爆の後、たくさんの人が川に逃げたでしょう。ほとんどの人が折り重なるようにして川の中で死んでいたの。満潮になると魚が川をあがってきて、その死体をついばんでいたの。」

戦争の体験、被爆という体験は、かけがえのない「いのち」と人生とが突然失われるという体験であり、体に傷を受けて一生涯病に苦しみ続けるという体験であり、そして何よりも、その肉体的な痛みと苦しみだけでなく、心に決して消し去ることのできない、大きな傷を負うという体験でした。

今も、被爆体験を話すことのできない人がたくさんおられます。そんな思い出したくもない体験を思い起こさせる真っ黒な焼け焦げた十字架を礼拝堂にかかげるまでに、五十年という歳月が必要でした。

「しょうがないの…」という切なる祈り

五十年という重い、重い時の流れを経て、被爆十字架を掲げることになったのは、何故だったのでしょか。それこそ、「しょうがないの…」という言葉に込められる、祈るような平和への願いからであつたに違いありません。

祈るようなその願いを記している一冊の本があります¹⁾。『天よりの大いなる声』という、日本 YMCA 同盟から出版された日本最初の被爆証言集です。その巻末に編集責任者・末包敏夫が「はえいづる青草」と題する一文を書き残しています。

1947年5月9日、「私は数十名の会員と共に、爆心地に近い都心部の焼跡の一角に立つた。ここは小学校の校舎跡で幾千の児童等が罹災した所だという。(中略)私はここに会員達と共に夕陽会をもつた。砂地と青草を座にして円陣を作り四時頃から六時頃迄祈った。悲しみと苦難を堪えてきた人々の神を仰ぎ求むる心は切なるものである。苦難にある時、人はいつも神の御側にある。祈り会が終わって立ち上ろうとする時であつた。私の側に座つていた沢野利枝子は大発見でもしたかのように、先生、クローバーが萌え出ていますよ、これと指さす。一同も驚いて一株のクローバーを見詰める。彼女の瞳は感激にふるえて濡れていた。七十五年不毛の地と宣告されたこの廃墟からクローバーが萌え出たのである。清々しい喜びと生命を讃うる感謝の泪が創造者に対して捧げられたのだ。夕焼けは周辺の山々に映え、静かにこの苦難に充つる街を軟かく紫金色に包んでゆく。ここには恨みも憎しみもない。凡てを赦し又赦されることを希う謙虚な心のみである。』²⁾

「恨みも憎しみもない。凡てを赦し又赦されることを希う。』³⁾

驚くべき言葉、信じがたい祈りです。

ひとりの被爆牧師⁴⁾が静かに人間の罪を見つめます。

「原子爆弾は怖るべき武器だった。…しかし戦争を一層悲惨なものにしたのは人間の憎

み争う心だ。これまでに誰も経験をしたことがないほどの、前代未聞の大きな爆撃を受けたにも関わらず、広島の人々は参ったとは言わなかった。いや、犠牲が大きければ大きい程、徹底的な復讐を誓った。ここに戦争の愚かさ、恐ろしさ、救い難い残忍さがある」と。

戦争によって残されるのは、深い、消えることのない傷だけではありません。そこには、やはりとどめようのない憎しみが生まれたいわけにはいかないのです。

憎しみが憎しみを生み、暴力が暴力を生み、偽りが偽りを生み出すことは、誰もがよく知り、味わっていることです。知ってはいても、その負の連鎖から容易に抜け出すことができません。言葉では到底言い表すことのできないほどの戦争の酷さと悲惨さによって絶望を味わったはずなのに、わたしたちの心は、今も、偏見と差別、暴力と争い、何よりも憎しみと復讐に支配されています。世界の各地で争いが絶えず、わたしたちの国も、力に対抗するためには力しかないと、自衛という名の軍事力の行使を公然と可能ならしめようとしています。それは国と国との争いばかりではありません。家庭の中にも、学校の中にも、会社の中にも、地域社会の中にも、刺々しいほどにエゴがむき出しになり、目を覆いたくなるほどのものから心密かなるものまで、憎しみやいさかいが渦巻いています。

であればこそ、見たくもない真っ黒に焼け焦げた十字架をかかげるほか、そう、「しようがない」のです。

いのちゆえの祈り

「キリストは双方をご自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者をひとつの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」(15-16)。

生きとし生けるものすべてにいのちをお与えくださった神は、正義や高邁な理想の故にではなく、ただ、かけがえのないそのいのちゆえに、今もなお争いと対立に傷つくこの世界から、敵意と憎しみと疑いを取り去るために、御子キリストをわたしたちに遣わしてくださいました。

いのちの主である神の愛にこたえ、わたしたちもまた、自分の正しさや自分の利益ばかりを追い求める罪から自由になるために、この地上に生きるすべての人々の間に、真の平和と豊かさを実現するためにこそ、この美しく、驚くべきこの祈りに皆さんの祈りを合わせていただきたい、そう願う次第です。

〈祈り〉

平和と和解の神よ、あなたは、御子イエス・キリストをこの世界にお遣わしくくださり、人と人とを隔てる罪を見ごしにされず、病としょうがいと性別と身分と民族の壁を取り去られました。そして、そのみ言葉とみ業によって、この世の闇を打ち破り、すべての人に救いの光を照らしてくださいました。その光によって、今こそ、私たちの歩むべき道を照らしてくださいますように。言い尽くせぬ感謝を、十字架の主、いのちの主、御霊の主であるイエス・キリストの御名によ

って御前にお捧げします。アーメン。

注

- 1) 1949年、イースターの朝に全国の書店に並んだ。
- 2) 「私はよくアメリカの友人と話している時、ヒロシマという言葉が、さっと顔を曇らせることを屢々経験した。われわれ日本人の果してどれだけが真珠湾やマニラ、南京の言葉に顔を赫らめるであろうか、私は深い慙愧と自省の念に打たれるのである。
…私はアメリカの友人達にヒロシマの人々のこの心持を伝えたい。かくも赦し、赦されんことを願う、このほのぼのと神を仰ぐ平和の心持を伝えたい。ナガサキやヒロシマの犠牲によって日本が潰滅から救われたことを、日本人が過去の深い罪科から悔い改むるの機会を與えられたことを神に感謝していることを伝えたい。そして世界の人々に再びこの地上にヒロシマを再現することのないように衷心より訴えたいのである。」
- 3) この切なる平和への祈りは、原爆投下翌年の8月6日、瓦礫となったヒロシマの教会に集まった市内諸教会の信徒たちが起草した「平和宣言」にも見ることができる。その冒頭には、原爆投下への恨みでも非難でもなく、凄惨な戦争を止めることができなかつた自分たちの罪を深く懺悔するという言葉が記されている。
- 4) 宗藤尚三(元広島府中教会牧師)

(日本基督教団塚口教会牧師)